1997年4月10日 発行
1960年7月15日 創刊

この<たより>の中の文章は、すべて自由に転載・引用していただいてけっこうです。ただ、その転載または引用された印刷物を一部、当会に送ってください。

90

●南京大虐殺記念館で考える：岩垂弘／●わたしの六・一五：柳下弘壽
【「声なき声のたより」復刻版が出来て】小林トミ／細田伸昭／望月寿美子
【中村泰次さん追悼】小林トミ／小林公吉／青木和子

南京大虐殺記念館で考える

岩垂弘

注目を引いた新聞記事

暮れに、一つの新聞記事が目にとまった。

一九九六年十二月八日付朝日新聞朝刊に載った「南京の惨状詳細にヒトラーに報告書」「ナチ現地幹部の遺品発見」との見出しがついた記事だ。

それは、ロサンゼルス発の特派員原稿で、一九三七年末から翌年にかけて旧日本軍が大虐殺を行ったとされる南京に駐在していた当時のドイツ・ナチス党南京副支部長、ジョン・ラーベが、ヒトラー総統あてに詳細な事件の報告書を提出していたことが明らかになったという内容だった。

それによると、ラーベは当時、南京に設けられた「安全区」を運営する国際委員会（四カ国、十五人）の代表として、約二十五万人の中国人避難民の救済に奔走した。

報告書によると、日本軍は南京侵略後、武器を捨てて安全区へ逃れた多数の中国兵を捕虜として扱わず数千人単位で組織的に処刑したという。一般人についても「兵士らしい特徴があったり、日本兵の前に現れたりしたというだけで、何千人もが殺された」と記述しているという。最終的な非戦闘員の死者については「中国側のいう十万人は多すぎるが、五万から六万人ぐらい」と推定しているとのことだ。

こうした大量虐殺について、ラーベは組織的に行われたと見ており、「日本軍は南京にいたと考えられる中国兵の数だけ、中国人を殺そうとしたのだろう」と推定しているという。

この記事には、この問題の専門家二人のコメントもつけられていた。笠原十九司・宇都宮大教授のそれは「当時、現地にいたドイツ人による初めての記録としての史料価値だけでなく、ヒトラーに訴えていたことの意味も重要だ。ラーベのような立場にある人間が、日本の同盟国の最高指導者にあえて訴えたこと自体、大虐殺の存在を裏付けるものだ」というものだった。

この記事が私の目を射たのは、私が以前から、この事件に関心をもち続けてきたからだろうと思う。そしてまた、自分自身で事件の現場を訪れてきたばかりだったからだとも思う。

この事件については、一九七〇年代の初めから日本国内で激烈な論争が行われてきた。つまり、南京で日本軍による大虐殺があったという報道に対し、「大虐殺はなかった」「大虐殺はまぼろし」というものである。ついには、永野茂門・法務大臣が毎日新聞とのインタビューで、南京大虐殺について「でっち上げだと思